

梅 盆 へ の

コーティング肥料の利用

埼玉県浦和農業改良普及所

関 口 明 男

私の所属する普及所管内における花木鉢物生産は、浦和・川口市でおこなわれている。正月から春先にかけて咲く梅盆が最も多く、その他の種類としては、ヒメリンゴ、カイドウ、サクラ、ボケ、クルメツツジ等多くの種類がある。総体の生産量は、ひとくちに30万鉢とも40万鉢とも言われている。

こういった鉢物の中で、生産量の最も多い梅盆に関しては、専業で生産している農家が多く、1戸で5,000～10,000鉢前後を生産している。【品種は新冬至が最も多く、7割程度を占め、残り3割を寒紅梅、野梅、玉牡丹等様々な種類が作られている。この栽培は（編集の都合で栽培図は割愛致します）台木生産を含めると、6号鉢に仕上げる場合6年を要する。鉢上するまでの5年の間に、充分樹を太らせ、樹形を作っていく、鉢上げ後は、水と肥料とのバランスをとりながら、花芽を付けて仕上げ、11月から12月にかけて正月用として販売されている。

このような、計画的量産体制の中で、年3～4回施肥の量と労力は、相当量要する。なかでも鉢上げ後の施肥は、1鉢々のため、特に労力を要する。したがって、1鉢上げ後の労力だけでも、省力できればという事で、昨年より施肥の省力化をてがけてきた。以上その概要及び結果について述べたい。

供試品種

新冬至、寒紅梅、野梅、思いのまま、玉牡丹

使用肥料 ロング[®]140日タイプ[®](13-3-11)、[®]ロング-140日タイプ(14-12-14)

使用量

第1表 月別吸光度および葉色

品種	種類・量	項目	6月3日		7月10日		8月11日		9月10日	
			吸光度	葉色	吸光度	葉色	吸光度	葉色	吸光度	葉色
新冬至	(13-3-11)	10g	1.2		1.2	6.5	1.4	6.0	1.3	7.0
	(14-12-14)	15	1.2		1.3	7.0	1.4	7.0	1.3	7.0
	対象区		1.2		1.3	7.5	1.4	7.0	1.3	7.0
野梅	(13-3-11)	10	1.2		1.2	7.0	1.3	8.0	1.3	7.0
	対象区		1.1		1.1	7.0	1.2	7.0	1.3	7.0
玉牡丹	(13-3-11)	10	1.3		1.3	6.0	1.5	7.0	1.5	6.0
	対象区		1.4		1.4	7.0	1.4	8.0	1.5	7.0

鉢上げ用土（赤土）1ℓ当り10gと15g

鉢上げ

試験区 5月10日、対象区 4月下旬

施肥

試験区 鉢上時用土に混用し、元肥として施用

対象区 4月（鉢上げ直後）、5月下～6月上旬、

9月中旬の3回、油粕主体に複合肥料を混ぜたものを施用

試験結果

- 着蕾数 寒紅梅、野梅は付きづらいと一般に言われているが、1節当り1.3個前後とほとんど差がなかった。
- 葉色 葉色板で測定したところ、鉢上げ後から1.5カ月程は明らかに対象区のほうが良かったが、7月下旬頃からは、差がほとんど認められず、8月以後は同じであった。

第2表 着 蕾 数

品種	肥料	項目		
		花芽数	節数	一節当り平均花芽数
新冬至	(13-3-11) 10g	144	106	1.4
	(14-12-14) 15	198	118	1.7
	対象区	176	101	1.7
野梅	(13-3-11) 10	100	76	1.3
	対象区	116	92	1.3
玉牡丹	(13-3-11) 10	132	86	1.5
	対象区	142	86	1.7

(3) 葉緑素含有量、グリーンメーターで測定した

が、終始ほとんど差は認められなかった。

(4) 肥料のタイプ、量による差異、調査個体数が少なく、断言はできないが、着蕾数で成分量、混含量が多いほうが、多いという結果がでた。

(5) 1鉢当り施肥に要する経費、6号鉢の場合、1鉢当り0.8ℓの

用土を要し、7号鉢の場合、1鉢当たり2.0ℓの用土を要する。

- (ア) 試験区、6号鉢用土1ℓ当たり10gの場合、1鉢当たり、1.6円かかり、15gの場合、2.4円かかる。7号鉢の場合、10gで4円、15gで6円かかる。
- (イ) 対象区、6号鉢10,000鉢に施肥をする場合、油粕5袋(単価1,800円)、配合肥料7袋(単価2,500円)を1回に施し、3回施すと79,500円かかり、1鉢に換算すると肥料代だけで7.9円になる。更に人件費を含めると、1回の施肥に7人手間を要し、1人1日4,000円かかり、1鉢に換算すると8.4円になり、合計すると16.3円かかることになる。
- (ロ) 試験を担当した生産者の方々の意見・感想。

ア 枝先を止めた後、先端部からの側芽の出がきわめて少ない。

枝先は、やわらかいうちに、全体のバランスをとりながら、指でつまんで止める。しかし、肥料が強いと、先端部より側芽が出てしまう。側芽が出た場合、二度手間になるだけでなく、側芽が出た部分が太くなり見苦しく、鉢物としての価値が下がる。このため、生産者によっては、あらかじめ、枝を長めに止めておき、側芽が伸びる心配がなくなってから切りつめる人もいる。

この場合、太くはならないが、指でつまむのと異なり、ハサミで切るため、切り口が白く残り、指でつまんで止めた物より品質としては劣る。

イ 油粕と異なり、鉢の乾きが早いようだ。また、鉢土が飛散しやすい。

油粕の場合、生の物を、配合肥料や骨粉と混合して施すため、鉢の上で固まり、表土の乾きをおさえ、灌水による用土の飛散を防いできたが、それがなくなったため、生育に影響を及ぼす程ではない。

ウ 油粕の流されやすい小鉢(3号)では、流される心配がなく、具合が良かった。

エ 肥料切れがないため、花付きが良いようだ。

以上のように、施肥労力の省力化という事だけでなく、経費の節約もでき、品質的にも良い物ができるといふ結果がえられた。これらの結果から実際の利用にあたっては、次の事項に注意を要する。

1. 使用量、用土1ℓ当り混合量は15g

10g、15gいずれも一様に生育し、経費面からは10gが良い。しかし、実栽培において、t単位で多量に用土

を使用する場合は、混合むらが想定されるため、安全率を考慮すると15g程度が良いと思われる。

1人の生産者から、葉色をみていると、もう少し多くてもいいのではないかという意見があった。施肥量は、生産者個々それぞれ異なるための意見であって、実際面においては、側芽の出が少ない事から推定して、単位当りの増量は可能と思われるが、そういった加減は、生産者個々の判断にまかせたい。

2. 混合時期、鉢上直前が良い。

この肥料は、温度と水分によって解けだすという事を聞いていたため、事前に混合した場合肥料成分が解けだして、肥やけをおこしてはという危惧から、昨年、今年と鉢上直前におこなった。

しかし、結果的には、対象区と同じ品物ができたが、これでは、鉢上後から1~1.5カ月は、対象区に比べ葉色が劣るという点がある。この点を改善するとすれば、1つには、鉢上直後油粕を側芽がでる程強くはなくて良いが、従来より少なめに施す。あるいは事前に混合しておき、肥やけをおこさない程度、解けださせておく方法とがある。

後者の場合は時期がはっきりしていない。本試験はなれるが、今年2月中旬に140日タイプ(14-12-14)1ℓ当り12g混合し、納屋に積んでおき、5月中旬クルメツツジを鉢上した残土のECを測定したところ、5月中旬で0.7mv、11月中旬で2.5mvあった。これらの結果から、2~3月頃混合できると思われるが、今後この点を更につめる必要がある。また、混用した残土は、翌年の使用をそのままではさける。

3. 使用タイプ、140日か、180日タイプの(14-12-14)が良い。

今年は140日タイプだけであったが、前年両タイプを使用した物を、今年開花させたところ、同じ様に開花し、芽吹きも変わらなかった。また今年の場合、5月10日に混合し、10月17日の段階ではほぼ80%流出しているという事であった。

以上が、昨年の結果をふまえて今年おこなった試験の概要、結果及び、それらの結果から想定される実践面における諸注意事項です。この試験は、生産者の方々の協力をいただき庭先を借り、これ等の人達とともに、施肥の省力化ができるか、どうかを判定しようということで始めた試験で、本誌のような紙面に載せるには、結果をうらづける数値が乏しく、心苦しく思います。